

# 昭和東南海地震の被害状況

東南海地震においてもっとも多く死者を出した愛知県ですが、なかでも多数の死者が出たのは名古屋市と半田市でした。名古屋市内で121名、半田市内で188名が亡くなっています。被害が拡大した理由として、名古屋市では軟弱地盤で発生した液状化、半田市では建物の耐震性の問題があげられます。

## 耐震性の問題

半田市の中島飛行機山方工場では、作業空間確保のため工場内部の柱を撤去していました。このため工場の耐震性が損なわれ、建物は倒壊し、被害が一層大きくなったのです。この工場だけで153名の犠牲者が出ました。そもそもこの建物の下地盤は良好なものではありませんでしたが、半田市でも同じように軟弱地盤にあった本工場は倒壊には至りませんでした。

同様に、地震によって全壊した名古屋市の日清紡績道徳工場でも航空機組み立てを優先し、レンガ造りを補強するための隔壁が取り払われていました。

## 液状化の発生

名古屋市における被害は、南部の軟弱地盤地域に集中しています。北区や西区、千種区での住家被害率は0%で、名古屋市全体の被害率をみると1.5%です。ところが、被害の大きかった港区、南区に注目すると、それぞれの被害率は14.1%、10.3%と、その割合は大きくなります。これらの地区は埋め立て地で、地震動による振動の烈しさに液状化が加わり、地盤破壊が行われたものと考えられます。このように、液状化現象がみられた地点では家屋の被害率も高くなります。

## 隠された大震災

東南海地震発生当時、日本は戦時下の情報規制の状態にあったため、この地震が国内に知れ渡ることはありませんでした。そのため、昭和東南海地震は三河地震(1945年1月)と共に「隠された大震災」と呼ばれています。しかしながらその被害は大きく、臨海部の重工業地区が大打撃を受け軍需生産力が低下したために、日本の敗戦が早まったとさえいわれています。

名古屋でも三菱重工業名古屋航空機製作所が使用していた日清紡績道徳工場(レンガ造り)が全壊したほか、南区住友金属呼続工場、岡本工業、中川区安立電気製作所などでも機械の崩壊やレンガ塀が倒壊するなど、軍需工場が大きな被害を受けています。当時、軍需工場には、学徒動員で学生も働いていましたが、その多くが圧死などで亡くなりました。

